# 第三回「懸命な普及活動」

1998年（平成10年）1月の東京商工会議所での記者発表会でスポーツ吹矢は最初からマスコミに注目され、同年4月22日の吹矢団体設立総会の模様はＮＨＫが衛星放送を通して22か国語で世界に紹介するなど多数のマスコミが報道してくれました。

## 「吹く」は「福」を招く

いきなりの記者発表会は大胆な告知方法でした。でも青柳清には自信がありました。例えば1999年11月の公認指導員養成講習会で彼はこう語っています。「スポーツ吹矢はただの的当てゲームではありません。腹式呼吸を使ったスポーツです。20本も吹くと5㎞のウォーキングに匹敵する運動量です。会員の方から『五十肩が上がるようになった』『お通じがよくなりました』『生活が楽しくなりました』などの声が寄せられています。そんな健康効果にマスコミが注目しているのです」

だが団体を設立しても、それを運営するスタッフは不在で資金もありませんでした。そのため軌道に乗るまではダイセイコーが物心両面でバックアップすることにしました。　ダイセイコー創業者の青柳清は「社会のお役に立つ」」ことをビジネスの信念としていたからです。

## 「ビックサクセス」で用具を開発

スポーツ吹矢には筒や矢、的などの用具も必要です。個人だけで楽しむ分には特に規格は必要ありませんが競技会などを行うためには統一された規格の用具でなければ公平な競技は望めません。また安全性の点でも統一されたものが欠かせません。そこで彼は2000年、スポーツ吹矢の用具の窓口としてダイセイコー内にビックサクセスを設置、スポーツ吹矢用具の研究開発にあたらせました。

ダイセイコーの社員たちも懸命に普及活動に努める青柳清を支えました。大会があると必ず社員たちがスタッフとして協力しました。そんな様子を青柳清は2003年のダイセイコー社内報9月号で、こう語っています。

「大会を支えるスタッフの機敏な動き、統一された指示系統、大会の運営には参加した皆さんが一様に驚いています。『このスタッフはどこから集めてきたの？』とよく聞かれます。そのとき私は『ダイセイコーの社員です』と説明するのですが皆さん、目を丸くされます。非常にうれしく、感謝の気持ちでいっぱいです」（この伝統は「一般社団法人銀座スポーツ吹矢倶楽部」でも生かされ、昨年12月7日の日刊スポーツ杯「第1回スポーツ吹矢大会」ではダイセイコーの社員が総出でスタッフを務めました）

青柳清はダイセイコーの本社に設けられた団体の本部を拠点に、週末になると全国に足を運び、最前線で普及活動に努める会員の皆様を直接、励ましました。そうした青柳清を先頭にする懸命な普及活動で2006年2月の団体の会員数は7000人、地域支部は195支部にまで増えました。

しかし翌月、スポーツ吹矢の前途を危うくするような大きな事件が起きます。

（以下次号）

ダイセイコーの書店で開催されたスポーツ吹矢の体験教室

（ダイセイコー社内報2003年8月号から）